

生ける神に仕えるダニエル（４）

2009. 2. 10 (火)

ベック兄メッセージ (メモ)

引用聖句

コリント人への手紙・第二 4章16節から18節

ですから、私たちは勇気を失いません。たとい私たちの外なる人は衰えても、内なる人は日々新たにされています。今の時の軽い患難は、私たちのうちに働いて、測り知れない、重い永遠の栄光をもたらすからです。私たちは、見えるものではなく、見えないものにこそ目を留めます。見えるものは一時的であり、見えないものはいつまでも続くからです。

へブル人への手紙 11章33節、34節

彼らは、信仰によって、国々を征服し、正しいことを行ない、約束のものを得、ししの口をふさぎ、火の勢いを消し、剣の刃をのがれ、弱い者なのに強くされ、戦いの勇士となり、他国の陣営を陥れました。

昔、神学校で学んでいた時、校長先生は大きな声で言ったのです。「覚えてもらいたい。あなたがたは悪魔の憎しみを感じなければ、あなたがたの信仰はゼロ以下…」と。

ダニエルとその友だちは、もちろん悪魔の憎しみを感じるようになりました。そして、初代教会の人々は、今読んでいただきましたように、「何があっても私たちは元気を失いません。どのような状況に置かれていても私たちは元気です。なぜかと言いますと、私たちは目に見えるものに頼らないで、信仰によって歩んでいるからです。目に見えないイエス様に頼っているから安心です」と。

真っ暗な環境の中にあってもなお信仰をもって証したダニエル、またその友だちについて考えることは、非常に大切ではないかと思えます。

読んでいただきましたへブル書の中にも、いわゆる「信仰の人々」、つまり徹頭徹尾主に頼った人々について書かれています。それは33節です。

へブル人への手紙 11章33節、34節

彼らは、信仰によって、国々を征服し、正しいことを行ない、約束のものを得、ししの口をふさぎ、火の勢いを消し、剣の刃をのがれ、弱い者なのに強くされ、戦いの勇士となり、他国の陣営を陥れました。

「信仰によって」、即ち、「目に見えない方に頼ることによって」ということです。「弱い

者なのに」とありますが、弱い者だけが主に頼ることになるのではないのでしょうか。多くの人々が「弱い」と言うのですが、本当はそう思っていないのかもしれませんが。なぜなら、相変わらず自分の力、知恵に頼っているからです。しかしダニエルとその友だちは、その奥義が分かったのです。「私たちは弱い。主に頼らなければ、主に守られなければ、何事もできない」と。

ダニエル書の言おうとしていることは、「暗やみの中での信仰の大切さ」ではないのでしょうか。私たちが、もうすぐイエス様がお出でになろうとしている末の世、最悪の世に生きていることは、疑いもない事実です。それは、国々のメディアによって違いもあります。日本の報道を見ると、「これからは大丈夫だ」と、そういうことを誰も言っていません。比較的正直です。「大変だ。この問題も出てきた。あの問題も出てきた。大変だ！」と。アメリカは違います。アメリカは、「今から大丈夫だ」と。一つの国民がそのように盲目にされるのは、不思議で、不思議でしかたがありません。今の世界は大変な早さでおかしくなっています。しかし暗やみの中でも、「主に信頼すると、生ける希望を持つことができる」ようになります。

私たちの生きているこの世を、ダニエルとその友だちの生きた時代に比べることは大切ではないのでしょうか。なぜなら、霊的な原則は、どの時代においても全く同じです。主の霊がお働きになって、私たちがダニエルやその友だちと同じ信仰に立つ人、即ち「主に頼る人」となることができたなら、本当に幸せではないかと思えます。

主に忠実に仕えたダニエルが絶望的な状態におかれたことがありましたが、彼の敵対者たちは「王」に頼んだのです。「王」により頼んでいる人たちは、「一箇月以内に、王ではなく神に願い求める者はみな、獅子の穴に投げ込まれるべきである」という、変えることのできない法律を発令するように迫りました。これは、彼らとしてはよく考えた願いでした。

ダニエルは、その時どのような態度をとったのでしょうか。急いで、親しい交わりを持った王のところへと走ったのでしょうか。敵の卑劣なやり方に対して、不平不満を抱いたのでしょうか。或いは、大勢の友だちを呼び集めて、逃れ道を求めたのでしょうか。違います。そのようなことをしようとしなかったのです。前に読みました6章10節です。

ダニエル書 6章10節

ダニエルは、その文書の署名がされたことを知って自分の家に帰った。——彼の屋上の部屋の窓はエルサレムに向かってあいていた。——彼は、いつものように、日に三度、ひざまずき、彼の神の前に祈り、感謝していた。

「自分の家に帰った」と。がっかりして、泣きながら帰ったのではないのです。祈るためでした。「感謝した」と。不思議な男です。目に見える現実よりも、主を仰ぎ見ることが大切だと分かったからです。結局、彼は法律によって許されていないことをしてしまった

のです。その時、彼は主に叫び、祈り、すべてを主にゆだねることができたので、恐れから解放され、主をほめたたえることができました。「感謝する」ことができたのです。

彼は、意識的にすべてのことを主に申し上げました。主が必ずみわざをなしてくださることを確信したのです。このような「信頼」は、決して失望させられることはありません。不可能と思われたことが起こりました。獅子はダニエルにあえて触れようとはしなかったのです。信じられないことですが、本当なのです。

私たちは、「主は生きておられる」と、毎日経験すべきではないでしょうか。ダニエルはそれを確信したのです。主は全部知っておられるだけではなく、主は「生きておられるお方」というだけでもなく、「主にとって不可能なことはない」と確信したのです。

主は、主に避け所を求める人たちの人生において、主が全能者であられることを間違いなく表わしていてくださるのです。私たちが御霊によって妥協することのない主のご支配のもとにある証し人となることができたなら、本当に幸せです。

ローマ書1章16節を見ると、次のように書かれています。パウロの証しです。

ローマ人への手紙 1章16節

私は福音を恥とは思いません。福音は、ユダヤ人をはじめギリシヤ人にも、信じるすべての人にとって、救いを得させる神の力です。

もちろん福音は、一つの教えではありません。福音は、「イエス様ご自身」です。私たちは、一つの教えを宣べ伝えるだけではありません。イエス様を紹介すればそれで十分なのです。「福音は神の力」です。「救いを得させる力」です。

ダニエルとその友だちは、この態度をとりました。彼らは主のみこころを、自分の心にしたのです。このような人々はこんにちも必要なのです。これらの人々は、主との交わりをなくした人々と、主との間を結ぶ帯のような役目をしているのです。これらの人々は、上から主の「新しい力」をいただいている人々です。

ダニエルとその友だちは、主から離れ、霊的に貧しくなり、墮落してしまったイスラエルの民のために、妥協することなく常にとりなし続けました。眠っているイスラエルの民、信じる者と主とを結ぶ帯の役目をしていたのです。

ダニエルとその友だちのような人々を、主はこんにちも探し求めておられるのではないかと思います。なぜなら、どうしても必要であるからです。

このダニエル書を読むと、ダニエルとその友だちは、同胞であるイスラエルの民が霊的に貧しくなり、その力を失くしていることを、よく知っていた人々でした。彼らは自分の考えよりも、大切なことは「みことばは何と言っているか」であるという確信を持っていたのです。彼らは、当時の旧約聖書をよく読みました。結果として、主のみこころが分かるようになったのです。そして、主のみこころが成就されるために、自らを主にささげました。「私たちは確かに弱い。何もできない。けれども、あなたのみこころだけが私たちを通して成るように」と祈り続けたのです。

彼らは聖書に頼りました。聖書は彼らにとって「主のみことば」でした。しかし、頭の知識を得るために、彼らは聖書を読んだのではありません。主の思いを知るためでした。そして、主の思いが彼らのうちに宿り、彼らは「みことば」によって変えられたのです。

信じる者でありながら、みことばを読んでもなかなか人格が変えられません。みことばがお客様のように出たり入ったりしています。ダニエルとその友だちの場合は、全く違いました。彼らは、「みことばに頼る」ことによって変えられたのです。「みことば」が彼らの心の内の主人となり、彼らを支配し、彼らはその「みことば」によって主のみこころのままに変えられていきました。彼らは、主のみこころを知ると、少しも妥協することなく、主のみこころを成し遂げるために己をささげました。その結果はいったいどうだったでしょうか。彼らは何が起こっても、どのようになろうとも、恐れませんでした。火の炉も、獅子の穴も、彼らにとって問題ではなかったのです。

各時代にあって、主はこのような人々を探し求めておられます。彼らは、主のご目的に心の目が開かれた人たちでした。そして、彼らは眠っている信者と主との間を取り持つ、とりなし手となったのです。聖書の真理をただ学び、ただ聞き、ただ宣べ伝えるだけでは何もなりません。聖書の真理が私たちから切り離すことのできない、私たちのいのちとなっていなければならないのではないのでしょうか。

主のみこころを行なっている人々、即ち主のご支配を受けている証し人は、確かに悪魔の攻撃の真っ只中に置かれているということです。ダニエルとその友だちは、どのように攻められたのでしょうか。彼らの証しに対する報いは決してなまやさしいものではなかったのです。妬みと憎しみと死が彼らを襲ってきました。けれど、彼らは少しの動揺も見せず、堅く立って動かされず、次々とやってきた戦いに勝利者として勝ち進んでいったのです。

このダニエル書を読むと、六つの戦いについて書き記されています。それはダニエル書1章から6章までです。

* 1章に出てくる戦いは、「異邦の習慣や放縦に対する、主なる神の節制の戦い」です。

主の側につくダニエルとその友だちは、異邦の若者より健康に勝り、知恵も十倍勝り、異邦の習慣と放縦に対して勝ちました。考えられないことです。

ダニエル書 1章15節

十日の終わりになると、彼らの顔色は、王の食べるごちそうを食べているどの少年よりも良く、からだも肥えていた。

ダニエル書 1節20節

王が彼らに尋ねてみると、知恵と悟りのあらゆる面で、彼らは国中のどんな呪法師、呪文師よりも十倍もまさっているということがわかった。

倍ではなく、三倍でもなく、十倍。ちょっと考えられないことです。

* 2章に出てくる戦いは、「異邦の迷信と魔術に対する、主の知恵の戦い」です。

異邦の博士、魔術師たちは、自分たちの無力さを告白し、ダニエルは、全能なる主の力によって勝ちました。主を賛美したのです。2章20節。

ダニエル書 2章20節から23節

ダニエルはこう言った。「神の御名はとこしえからとこしえまでほむべきかな。知恵と力は神のもの。神は季節と時を変え、王を廃し、王を立て、知者には知恵を、理性のある者には知識を授けられる。神は、深くて測り知れないことも、隠されていることもあらわし、暗黒にあるものを知り、ご自身に光を宿す。私の先祖の神。私はあなたに感謝し、あなたを賛美します。あなたは私に知恵と力とを賜い、今、私たちがあなたにこいねがったことを私に知らせ、王のことを私たちに知らせてくださいました。」

あり得ないことが事実になりました。

ダニエル書 2章47節

王はダニエルに答えて言った。「あなたがこの秘密をあらわすことができたからには、まことにあなたの神は、神々の神、王たちの主、また秘密をあらわす方だ。」

大変な戦いでした。ダニエルとその友だちは、自分の弱さ、無力を感じました。ですから、主に頼ることによって奇跡を経験しました。前よりも主を知るようになり、主を礼拝せざるを得なくなったのです。

* 三番目の戦いは、3章に出てきます。「偶像礼拝と、まことの礼拝の間の戦い」です。

異邦の王でさえ、次のように告白せざるを得ない結果になってしまいました。

ダニエル書 3章27節から29節

太守、長官、総督、王の顧問たちが集まり、この人たちを見たが、火は彼らのからだにはききめがなく、その頭の毛も焦げず、上着も以前と変わらず、火のおいもしなかった。ネブカデネザルは言った。「ほむべきかな、シャデラク、メシャク、アベデ・ネゴの神。神は御使いを送って、王の命令にそむき、自分たちのからだを差し出しても、神に信頼し、自分たちの神のほかはどんな神にも仕えず、また拝まないこのしもべたちを救われた。それゆえ、私は命令する。諸民、諸国、諸国語の者のうち、シャデラク、メシャク、アベデ・ネゴの神を侮る者はだれでも、その手足は切り離され、その家をごみの山とさせる。このように救い出すことのできる神は、ほかにないからだ。」

「王の命令」は、結局、自分の命令です。今まで神と関係のなかった男、当時の世界を治めた男は命令しました。どうして、王はこのように福音を宣べ伝える者になったかと言いますと、哀れでちっぽけな虜になった人々が「妥協」しなかったからです。「信頼」していたからです。

*四番目の戦いは、「異邦の王の傲慢に対する、主の支配の戦い」です。

異邦の王は、気が狂い、主の御手によってそれがいやされたとき、次のように告白するようになりました。これも素晴らしい証しです。

ダニエル書 4章34節から37節

その期間が終わったとき、私、ネブカデネザルは目を上げて天を見た。すると私に理性が戻って来た。それで、私はいと高き方をほめたたえ、永遠に生きる方を賛美し、ほめたたえた。その主権は永遠の主権。その国は代々限りなく続く。地に住むものはみな、無きものとみなされる。彼は、天の軍勢も、地に住むものも、みこころのままにあしらう。御手を差し押えて、「あなたは何をされるのか。」と言う者もない。私が理性を取り戻したとき、私の王国の光栄のために、私の威光も輝きも私に戻って来た。私の顧問も貴人たちも私を迎えたので、私は王位を確立し、以前にもまして大いなる者となった。今、私、ネブカデネザルは、天の王を賛美し、あがめ、ほめたたえる。そのみわざはことごとく真実であり、その道は正義である。また、高ぶって歩む者をへりくだった者とされる。

「高ぶって歩む者を、へりくだった者にされる」。これは、この王様の自分の経験でした。彼は、主を知るようになったので主をほめたたえたのです。考えられない奇跡です。

*五番目の戦いは、「主の宮の物をかすめ奪う主を侮る者に対する、主を恐れる者との戦い」です。

王ベルシャツアルは、壁に書かれた文字の意味を知り、驚いたのでした。しかし、その晩死んでしまいました。

ダニエル書 5章1節から4節

ベルシャツアル王は、千人の貴人たちのために大宴会を催し、その千人の前でぶどう酒を飲んでいました。ベルシャツアルは、ぶどう酒を飲みながら、父ネブカデネザルがエルサレムの宮から取って来た金、銀の器を持って来るように命じた。王とその貴人たち、および王の妻とそばめたちがその器で飲むためであった。そこで、エルサレムの神の宮の本堂から取って来た金の器が運ばれて来たので、王とその貴人たち、および王の妻とそばめたちはその器で飲んだ。彼らはぶどう酒を飲み、金、銀、青銅、鉄、木、石の神々を賛美した。

「金、銀の器」は、主にささげられたものだったのです。

ダニエル書 5章22節、23節

「その子であるベルシャツアル。あなたはこれらの事をすべて知っていながら、心を低くしませんでした。それどころか、天の主に向かって高ぶり、主の宮の器をあなたの前に持って来させて、あなたも貴人たちもあなたの妻もそばめたちも、それを使ってぶどう酒を飲みました。あなたは、見ることも、聞くことも、知ることもできない銀、金、青銅、鉄、木、石の神々を賛美しましたが、あなたの息と、あなたのすべての道をその手に握っておられる神をほめたたえませんでした。」

心を低くしようとしなない人は、わざわざいす。神をほめたたえようとしなかったのです。

ダニエル書 5章30節

その夜、カルデヤ人の王ベルシャツアルは殺され、

とあります。

*六番目の戦いは、「悪意に対する、主の守りの戦い」です。

この6章は、一番よく知られている箇所です。獅子の口は主の力により閉ざされ、ダニエルは救われました。

ダニエル書 6章26節、27節

「私は命令する。私の支配する国においてはどこでも、ダニエルの神の前に震え、おののけ。この方こそ生ける神。永遠に堅く立つ方。その国は滅びることなく、その主権はいつまでも続く。この方は人を救って解放し、天においても、地においてもしるしと奇蹟を行ない、獅子の力からダニエルを救い出された。」

これらの戦いは、血肉、即ち人間に対する戦いではありませんでした。ダニエルとその友だちは祈りました。「主の助け」を、「主の導き」を、「主の守り」を求めたのです。祈ると、主は必ず答えてくださいます。

ダニエルが祈りを始めたとき、空中をつかさどる悪の霊が、ダニエルの祈りをつぶしてしまおうとしてダニエルの祈りを妨げたのです。10章を見てみましょう。

ダニエル書 10章13節

「ペルシヤの国の君が二十一日間、私に向かって立っていたが、そこに、第一の君のひとり、ミカエルが私を助けに来てくれたので、私は彼をペルシヤの王たちのところに残しておき、」

ダニエル書 10章20節

そこで、彼は言った。「私が、なぜあなたのところに来たかを知っているか。今は、ペルシヤの君と戦うために帰って行く。私が出かけると、見よ、ギリシヤの君がやって来る。」

とあります。これは、もちろん悪霊との戦いでした。けれど、ダニエルの祈りは、地獄だけでなく天国にさえも、届きました。天は、天使の長ミカエルを送り、ダニエルを助け、勝利を与えました。

主のご目的が成就されないように、吉祥寺集会の上にも激しい悪霊の働きがあるに違いありません。この恐ろしい悪霊の働きを身近に感じるこの頃、この恐るべき現実を見つめ、主の前に立ち続け、祈り続け、やがて天の窓が開かれ、奇跡を見るまで祈りたいものです。

主のみ栄えをこの目で拝し、主ご自身をご自分の教会を建て上げられるようにと望む者は、もしどんなに何倍も熱くされた試みの炉に投げ入れられることがあっても驚きません。獅子の穴に投げ込まれても驚きません。そして、主の助けを求める者は、主の偉大さを経験することができます。主のご支配を受けた証し人は、主のみこころを自分の心とした人々、悪魔の攻撃の真っ只中に置かれている人々、この世より選び分かれた人々です。この世より選び分かれた人々は、主のご支配を受ける証し人です。

前に読みました1章8節を見ると、ダニエルとその友だちは、王の食物を食べることによって自分を汚すまいと心に思い定めました。王にこのように申し上げ、王の機嫌を損ねてまで王の食べ物を食べないということは、極めて要領の悪い、駆け引きの下手なやり方なのではないでしょうか。「その食べ物は食べ慣れていないから」と言って、言い訳もできたはずです。

なぜダニエルとその友だちはそのように決心し、王に申し上げたかと言いますと、彼らは、少し妥協しても自分の証しの力が薄れてしまうことをよく知っていて、それを恐れたからです。もし彼らがこの世と妥協して、世人と同じに見られたいと思うなら、全能なる神が自らを支配しておられるという証しの力がすぐになくなってしまふことは明らかです。結局、妥協せず主の道を歩むなら、主のみ栄えが現わされていく。もし、妥協するなら、み栄えは決して現わされない、ということを彼らはよく知っていたのです。

結果はどうでしょう。主は、ダニエルとその友だちに、ご自身の素晴らしい力をお示しになりました。ダニエルとその友だちは、人の憎しみ、悪魔の憎しみに打ち勝ち、輝かしい勝利をおさめたのです。多くの方は世と妥協して優柔不断になり、証しの力をなくしてしまっています。この世と妥協してしまった信者を通して、主がご自身のみ栄えを表わされるはずはありません。

ダニエルの時代の、主に選ばれた民イスラエルは、この世に例えられる異邦の国バビロンに、たましいを売ってしまいました。けれど、ダニエルとその友だちはそうしなかったのです。彼らはパウロと同じように、ガラテヤ書6章14節のごとく言っています。

ガラテヤ人への手紙 6章14節

しかし私には、私たちの主イエス・キリストの十字架以外に誇りとするものが決し

てあってはなりません。この十字架によって、世界は私に対して十字架につけられ、私も世界に対して十字架につけられたのです。

ダニエルとその友だちは、絶えず主のご愛、主のご支配のうちに留まり続けましたので、主のご栄光は彼らを通して現われていったのです。妥協せず常に主に仕える彼らは、ほかの人々に勝ること十倍ということが明らかになりました。

世から選ばれ、聖め分かたれるということは、主と一つになり、主の恵みと力を絶えず経験する結果をもたらします。この世と妥協して、たましいがどっちつかずになってしまう者には、証しの力がなくなります。主を新しく見たてまつることができなくなります。

妥協したキリスト者は、言い訳にパウロの言葉を自分勝手に解釈しています。即ち、「弱い人には、弱い者になった。弱い人を得るためである。すべての人に対しては、すべての人のようになった。何とかして幾人かを救うためである」と。

しかし、パウロは決して妥協しなかったのです。妥協するよりも死んだ方がいいと彼は思ったのです。この世に妥協し、軟弱な生活に慣れてしまっているキリスト者は、一つのたましいも獲得することはできません。妥協は呪われます。不義と不法は、祝福を締め出します。

ダニエルの時代も今の時代も同じでしょう。どの時代でも悪魔が目指していることは、キリスト者を妥協させ、罪に引きずり込み、霊の力をなくし、証しの力をなくそうとすることです。

ダニエルとその友だちは、汚れから身を避けました。悪魔は、自分が彼らの心を脅かすことができないことを知ると、今度は外から攻撃してきました。彼らを火の炉に投げ入れました。主はこんにち、からだなる教会に対する主のみこころをわきまえ知り、悪魔の攻撃が激しくても妥協せず、自らをささげ切る人々を、求めておられます。

これらの人々はいつも主のご臨在を覚え、その祈りはいつも聞き届けられます。どんなに悪魔の攻撃にあっても、ダニエルは勇敢に証しし続けました。主が彼と共におられたからです。もし、私たちが主の全きご支配の内に自らをゆだね、主のご栄光のみを目指して歩むなら、ダニエルの神は私たちと共に歩んでくださるに違いありません。

本当にパウロの証しは、素晴らしい証しです。もう一度読みます。6章14節です。
ガラテヤ人への手紙 6章14節

しかし私には、私たちの主イエス・キリストの十字架以外に誇りとするものが決してあってはなりません。この十字架によって、世界は私に対して十字架につけられ、私も世界に対して十字架につけられたのです。

了